

伊勢神宮崇敬会だより

みもすそ

特集

伊勢本街道

お伊勢さんの歳時記

- 7月14日 第66回伊勢神宮奉納全国花火大会
- 8月 4日 風日祈祭
- 9月上旬 抜穂祭
- 17日 大麻屑頒布始祭
- 22~24日 秋の神楽祭
- 23日 秋季皇霊祭遥拝
- 24日 神宮観月会
- 30日 大祓
- 10月 1日 神御衣奉織始祭
- 1日 御酒殿祭
- 5日 御塩殿祭
- 13日 神御衣奉織鎮謝祭
- 14日 神御衣祭

内宮を流れる五十鈴川は、倭姫命が御裳を濯がれたことから「御裳濯川」(みもすそがわ)とも雅称されます。題字は本会会長の松下正幸による浄書。表紙は、伊勢本街道・多気宿。

第87号
平成30年夏



石割峠の切り通しを越えて黒岩へ。

諸木野から石割峠への登り口にまつられる山の神。



諸木野の里には立派な屋敷が点在する。



榛原の旧旅館「あぶらや」を出発。



伊勢本街道保存会の池田さん。



桃俣で旅人をもてなす「みつえ昔話の会」の岡本さん。



山粕の集落。「めだか街道」を標榜し、家々の軒先にメダカの水槽が並ぶ。



高井の千本杉。そばには井戸が。

特集 伊勢本街道

江戸時代、庶民が「一生に一度は」と夢見たお伊勢参り。西国からの参宮者が辿った伊勢本街道は、大阪玉造を起点に榛原から九つの峠を越えて伊勢へ至る最も古い参宮道。険しきゆえに開発をまぬがれた峠道や宿場町には美しい自然とおもてなしの心が受け継がれています。



名松線・伊勢奥津駅近くの街道。



お伊勢さんへの街道

天下泰平となった江戸時代、庶民が一生に一度は行きたいと憧れたのがお伊勢参り。関東からは東海道と連結する伊勢街道で。関西からの参宮者は、奈良を経由して伊勢へ至る伊勢本街道を利用するのが一般的でした。

「お伊勢参りしてこわいとどこか、銅坂、櫃坂、鞍取坂、津留の渡し、宮川か」。難路として俗謡に唄われてきた伊勢本街道は、奈良に都があつた時代からの最も古い参宮街道です。

伊勢湾岸の平野部を通るため大部分が舗装された伊勢街道とは異なり、峠道には今も自然道が残され、魅力あふれるウォーキングコースとなっています。

榛原から高井の千本杉へ

大阪玉造から伊勢まで約一七〇kmの伊勢本街道。今回の旅の始まりは、近鉄榛原駅近くの旧旅館「あぶらや」。追分に

「右いせ本かい道」「左あをこえみち」と刻まれた札の辻道標が立っています。あをこえみちとは阿保を越える初瀬街道のこと。参宮街道は出発地や経由地によっていくつもの道筋があり、奈良時代

は伊勢本街道が主流でしたが、江戸時代は初瀬街道が参勤交代で使われるようになります。伊勢路の主役は初瀬街道へと移っていきました。

榛原の常夜燈を越え、近鉄の高架をくぐると、街道脇に「伊勢本街道保存会」の事務局があります。

「街道の整備を始めたのは十年ほど前。当会の代表が四国八十八ヶ所霊場を巡り、遍路道の整備やしるべ札をつけるボランティアにも参加した経験から、奈良でも同じことに取り組みれば伊勢本街道を歩く人が増えるのでは、と考えました」事務局長の池田雅さんもお遍路を体験されたそうで、四国で受けた接待の感動を奈良でお返ししたいと、街道歩きの人々に呈茶や道案内を行っています。

宇陀川沿いの墨坂神社に道中安全を祈願し、国道三六九号を東へ。高井バス停から国道を離れ、竹林の小径を歩いていくと、千本杉（県天然記念物）が迎えてくれました。十六本の杉が成長過程で融合した巨樹で、そばには井戸があり、水を汲んで休憩している先客がいました。ひしゃくを携えて伊勢をめざした昔の旅人もきつと喉を潤したことでしょう。

道中には、「おいせまいり」と記された保存会のしるべ札が所要所につけられており、安心して歩けます。



自然石に「右さんくう 左まつさか道」と刻まれた榊田川「津留の渡し」跡道標。



横野の集落。



櫃坂を下った横野には常夜燈、弘法大師の御堂、長瀬不動尊が並ぶ。



難所と怖れられた飼坂峠への道(上)。路傍にたたずむ首切地蔵(右)。



街道トピック



奈良県では「太神宮」と刻まれていた常夜燈の文字が、三重県に入ると「太一」に。



倭姫命ゆかりの御杖神社。



鍛形不動院前の仏足跡。足の病に靈験ありと草鞋を掛けていく人も。



和歌山街道との合流区間にある大石不動院の不動滝、岩にも銘が彫られている。



深い軒、連子格子、漆喰壁。北畠氏のお膝元であった宿場町多気には趣ある家並みが続く。八手俣川の手前には、珍しい卵形の道標が。「すぐいせ道」の反対側には「すぐいせ道」と刻まれている。



四社神社の祭具を掲げる御杖の家。



古民家民宿「おもや」。

大洞山を背に美杉を歩く。



奥津では、旧屋号を伝える暖簾が旅人を迎える。



倭姫命ゆかりの御杖村

諸木野集落の入口には「北海道の名付け親 松浦武四郎 嘉永六年ここを通る」の表示板が建っていました。武四郎が吉田松陰と海防について議論した年です。諸木野にはかつて関所があったそうで、戸数は少ないながら、往時の賑わいを伝える立派な家が点在しています。

赤い鳥居が迎えてくれるのは愛宕神社。小さな社殿は春日造で、国道から離れた山里ながら境内は荒れておらず、信仰の厚さをうかがわせませす。

石割峠(標高六九五m)は本街道中、最も高い峠です。岩を割って開いたともいわれる狭い切り通しですが、勾配は思いのほか緩やかでした。

山粕峠(標高六五〇m)を越えると、曾爾村です。「めだか街道」という職がはたらく山粕地区では、玄関先でめだかを飼育する家が多く、おもてなしの行灯にもめだかの絵が描かれています。

難所と怖れた鞍取峠(標高五九〇m)への入口は国道三六九号から。大きな看板と東屋が目印です。峠までは九十九折れの急登で、汗が一気に噴き出し、なるほど難所だと実感します。

峠を境に御杖村に入ります。村には、御杖神社をはじめ、御杖代として天照大御神を伊勢へと導いた皇女・倭姫命ゆかりの旧跡がたくさん残っています。

桃俣地区の白鬚稲荷神社の傍らに、「伊勢本街道」の資料を掲示する民家がありました。あるじの岡本秀勝さんは

「みつえ昔話の会」会員で、自宅前に休憩所を設け、旅人に街道の話題を提供していらっしやるそう。

「本街道を歩くのは大阪の人が多いですね。年末年始には玉造から伊勢まで一七〇kmを歩かれる団体さんもいますよ」

桜峠(標高五三〇m)を越え、村役場のある御杖の中心地へ。民家の軒下に小さな木植を掲げる家があったので尋ねると、四社神社の改築に用いた祭具だと教えてくれました。四社神社には倭姫命が使ったとされる井戸があり、旅人は旅の無事を祈っていくそうです。

街道からは外れますが、御杖神社には寄り道してぜひお参りを。倭姫命が自らの杖を残したとされる伝承の地です。

趣ある美杉の宿場町

榛原から数えて七つめの峠・岩坂峠(標高四九五m)を下ると三重県です。街道沿いの常夜燈には、奈良では「太神宮」と刻まれていましたが、三重に入るると「太一」に変わります。

桜で有名な三多気からは、なだらかな大洞山が一望でき、絶景です。

JR名松線の発着駅がある奥津界限は、民家の玄関先で旧屋号をデザインした暖簾が揺れ、宿場町らしいおもてなしを感じます。古民家を活用したカフェやギャラリー、民泊施設もあり、ゆっくりしたいエリアです。

飼坂峠(標高四八四m)へ向かう道中には首切地蔵と腰切地蔵がまつられてい



相可高校前の棕の大樹下には塞の神、西行法師の歌碑が。



街道最大級の四疋田常夜燈。



水分神社



田丸神社参道の常夜燈。

山田

柳の渡し跡

筋向橋で伊勢街道と合流し外宮へ

度会橋

尾崎琴堂記念館

城田

たまる

熊野街道

田丸城跡

田丸神社

坂手国生神社

常夜燈

参宮線

権原神社

とさだ

伊勢本街道

水分神社

たき

常夜燈

随泉寺

明通寺

龍華寺

浄土寺

相可

長新

おつか

相可高

浄土寺

燈籠・西行歌碑

四疋田常夜燈

歯痛地藏

楠田川



長新の名物「まつかさ餅」。

ます。案内板によると「かつて山賊が出没して旅人の命を奪った」とか。当時は鬱蒼とした暗い山城だったでしょう。

伊勢国司北畠氏が居館を構えた上多気は、江戸末期には九軒の旅籠を数えた宿場。連子格子や漆喰塗りの虫籠窓など往時をほうふつさせる建築群が見事です。

ここから先はほぼ国道三六八号をなぞるように進みます。美杉町と松阪市飯南町の境界が櫃坂(仁柿峠)。峠を下り切った集落が横野で、弘法大師の御堂、常夜燈、柿野神社などがあります。国道一六六号とぶつかったら左折し、ここからしばらくは和歌山街道と重複する道筋となります。

津留の渡しは、松阪市と多気町の境。昭和四年に橋が完成するまでは、兩岸に張り渡した縄を手繰って、人と物資を渡していました。日頃は穏やかな楠田川もひとたび増水で氾濫すると、行き交う人々を足止めし困らせたのでしょうか。

神の御心になうみち

楠田川右岸を下って行くと、地元で足神さんと呼ばれる仏足跡、伊勢三郎義盛の物見の松、いぼ地藏、歯痛地藏：旧き時代をしのばせてくれる史跡が続きます。四疋田の常夜燈は高さ五・五m。地区の大庄屋が寄進したもので、街道中最大級です。



神都への玄関・宮川「柳の渡し」跡。(度会橋より)

JR紀勢本線を渡るとすぐ水分神社があります。社殿は神明造、鳥居も伊勢式です。かつてはここに清水が湧き出し、茶屋で休む旅人が喉を潤したとか。

くねくねと蛇行する道を数キロ進むと、玉城町の田園地帯に差しかけります。北畠親房が築いた城下には、田野の神々をまつる神宮の撰社末社が点在しています。城下町田丸は熊野街道の起点となる交通の要地。伊勢参りを終えた旅人の多くは、ここで白装束に姿を改め西国巡礼へと旅立ちました。

皇大神宮撰社・狭田国生神社前を進んでいくと、やがて宮川畔に出ます。かつての旅人は渡し船で伊勢へ入りました。柳の渡し(上の渡し)は、明治四十四年(一九一一年)、度会橋が架かるまで利用されてきました。

古来「神の御心に叶うみち」と信じられてきた伊勢本街道。多くの旅人をもてなしてきた伝統が息づく最古の参宮道を訪ねてみてはいかがでしょうか。